

2023年8月27日

「主のものとして」

ローマの信徒への手紙一 14:1-9

早川 真牧師

ローマの信徒への手紙は、パウロが、ローマにいる信徒たちに書き送った手紙ですが、ここでパウロは、ローマの教会が分裂、もしくは対立することを危惧していると言えます。なぜなら、当時ローマの教会では、二つのグループがあって、一方の人々は食べ物や祝祭日にとっても気を遣う人々で、もう一方の人々はそれらに気を遣わない人々だったからです。しかしパウロがここで示す大切なことは、そのどちらも主への感謝をもってそれをしているということであり、そのことによって私たちが兄弟姉妹を裁かないように、又軽んじないようにする、ということです。

それは一言でいうならば、平和のためでありましょう。パウロは、ここで、神への仕え方において互いに違いを持つクリスチャン同士が平和の内に一致を持つように導いています。主であるキリストは十字架の上で死に、また復活してくださいました。それは、そのことにより、キリストが、ご自分に仕えるすべての者の主となるためでした。そして、このキリストがすべての者の主となられた、つまりすべての者が主のものとしてされた、ということによって、私たちは本当の一致へと導かれます。パウロはここで、主のものとしてされた人々は、もはや最大の関心事が生き死にではなくキリストになると示しています。このイエス・キリストのために生きる時、私たちもまた、仕えられるためではなく、仕えるために命を献げるものとして生きていきます。私たちが互いに互いを主のものとして受け入れ合い、真の平和と一致への道を歩むことができるように、共に祈りを合わせたいと思います。